

魅せられて 私の「歌」道標

今野寿美

一人暮らしの生活も五日目を迎えた。明日になれば家族が揃い、またいつもの夏の日々にもどる。予定していた仕事は半分そこそこだけけれど、まあこんなところかもしれない、と自分で慰める。それにしても、やっぱり一人でいればそれだけのことはあるなどというのは勝手な言い分だろうか。もうあと一週間あれば、なんて言ったらバチ当たりだろうか。

五年間、「明星」の歌人山川登美子の歌を「明星」

の誌面にたどってゆく作業をしてきた。この夏はその仕上げをするつもりで、できればまとまった時間がほしかった。中学二年の息子が陸上部の合宿に行っている間は、絶好のチャンスである。貴重な六日間で、夏休みに入る前からわたしは心中秘かにわくわくしていた。親切な連れ合いは、自分のためだけに女房が食事の支度をするのに気兼ねして、「二人でどこか涼しいところにもころろ」などと提案してくれた。連れ合い自身もその間に一気にやっつけてしまいたい仕



プロ、コピー機、枕まで車に積み込んで、出ていったという次第なのだ。行き先は、小淵沢（長野）にある弟の別荘である。

結婚したころは、たしか連れ合いは最初の評論集を準備しているような時期だった。わたしはといえば、家のなかにたくさんの歌集のあることが嬉しくて、片っ端から読んでほしげと歌を作りたっていた。でも、歌のためにひとりにしてほしいなどという発想は、まずなかった。歌を作るようになって五年ほどたっていただろうか。

事があって、お互いに電話もこないくらいの静かな環境で集中できれば、と思っただけ。でも、二人でこもって仕事になるかどうか……。それに、八年近く使ったワープロの登録機能が壊れてしまい、思い切ってパソコンに切り替えたばかり。ノートパソコンはまだ買ってないから、わたしは家でするほかない。そこで「お願いだからわたしをひとりにしてちょうだい」ということになり、彼の方が仕事に必要な荷物をまとめ、自分のワー

古典文学が好きで、専攻は中古の物語だったが、もうそろそろ卒業の準備をといるころ、気ままに『古今集』を読んでいて壬生忠岑のこんな一首であった。

かすがのゆきま 春日野の雪間をわけておひいでくる草の はつかに見えし君はも

細かいことを抜きにしていうと、この歌を読んだとたん、わたしは歌という型式の見事さに惚れ込んでしまったことになる。歌のスタイルに初めて触れたわけではないのに、このときばかりは圧倒されるような思いで、自分でも歌を作りたいと直結してしまつたらしい。とにかく「はつかに見えし君はも」というフレーズが、わたし好みの古風な言い回しで一読気に入つてしまつた。そして古風でありながら、現代人の恋の情と全く変わることはない一瞬の思いを、これ以上ないほど簡潔に示していて、二十代はじめの心理をいたく刺激したことはたしかだつた。さらに、これだけの凝縮された詠嘆を引き出すために置かれていゝるそこまでの叙述は、春日野の雪を割つてほんのちよつぴり顔を見せた若菜の緑の愛らしさの形容だけだ。いわばその鮮やかさを象徴的に添えたかたちである。序詞などと呼ばれる和歌の技法の詳細などはさておき、歌という詩のもつ不思議な力、歌のなかに置かれたことばが発揮する美しさに、わたしは心底感服してしまつた。

それから、手当たり次第に歌にしたててゆく毎日が始まる。美しい歌など最初からできようはずもなく、また古典から出発しているだけに、現代短歌というものをわたしは全く知らない。にもかかわらず、卒論にかける時間より歌を考えている時間の方が断然多いう

えに、なんといつても楽しかつた。新聞歌壇に投稿していたのもその後一年ほどの間のことである。熱中するうちに、これは一生ものであると思ひ始めた。就職のことなどあまり真剣に考えていなかったのに、そうとなつたら教員がいいと頭から決めてしまつところがおかしくもある。学校という職場なら、短歌なんぞをいじっているのにそうかけ離れた世界ではない、とたしか考えたのだつた。

もちろんそんなのは甘い考えだつたに違いないが、結局勤め先になつた都立高校の定時制は、定時制ということ自体が自分には目新しく、また同僚には詩人や俳優や演劇通やら、『太平記』の権威やら、利殖の天才も含めて何か妙に活気があり、自分の目指すことをするといふ点で、けっこう触発された。そうこうするうちに出会つて結婚した三枝昂之も偶然ながら都立定時制の教員だつたから、同じ時間帯で勤めながら家ではともども歌にエネルギーを傾けるといふスタイルが新婚後の日常として定着した。歌をつづけたい一心で教師になつたわたしにしてみれば、願つてもないスタートだつたと思う。

三枝と永田和宏は歌を通しての親友で、結婚後もよく行き来があつた。わたしは結婚することになつて初めて『森のやうに獣のやうに』の著者として遠く憧れていた河野裕子とことばを交わすようになったのだけれど、わたしたちが一緒に暮らすようになってしばらくしたころ、河野が電話でわたしに言つたものだ。「二人で歌作るつてしんどいわよねえ。結婚したばかりのころは永田も何首できたの？　なんて言いながら玄関入つてきたりしたけれど」。愚痴どものろけともつかないやうなつぶやきだつた。本誌のこのコーナーで、永田和宏が「河野との戦争のやうな」と家庭生活を振り返っていた

が、あながち大げさでもないのだろう。

わが家はといえば、年齢も開いていたし、彼の方はすでに短歌を身近に引き寄せて二十年近く、短歌雑誌の仕事もコンスタントにこなしていた。どちらかといえば、わたしは教えてもらおう立場だから、対等にやりあうなんてレベルではなかったというのが本当のところだ。それでも、当時から、よく意見は求められた。お互いに原稿の最初の読者になるという習慣はそのところからのもの。歌は短いだけに、切りつめた表現のなかで作者の意図が通るものかどうかが決め手だが、それは第三者の目で見る方が確実である。文章にせよ、意の通りにくさなどは、本人では見過ごすことも少なくない。

ちよつと恥ずかしい言い方だが、ものを書くことについては、わたしは三枝に相当鍛えてもらったと思っている。昭和五十四年、という結婚した翌年だったが、角川短歌賞をいただいた。そうなる短歌雑誌などに何か書く機会も出てくる。エッセイでも書評でも小さな論評でも、そのころはかなり緊張してえらく時間がかかった。やつと書いたものを読んでもらう。彼の部屋に持って行って、最初のひとことを待っているときの気分は呆れるほど悲観的で落ち着かなかつた（これは今でもそう変わりが無い）。

彼もまたヤケに厳密なところがあつて、ダメなものはダメというところがはっきりしている。そうすると彼がウンというまで書き直すわけだ。締め切りに間に合わないなどと泣きついてても、恥かいていいなら出せ、という返事。でもそのかわり、わたしが歌のことで苦勞しているときは、家事の面でどんなに手を抜いても文句は一切ない。むしろ家事なんてほったらかしで女房が歌に関わっているくらいの方が嬉しいらしい、という少し変わった亭主である。

こどもが小さい間はさすがにずいぶん消耗したが、その子が小学校に入るとき、思い切つて高校の教員をやめた。学校関係の人は、やつとラクになるところまで来たのにどうして？ と誰もが怪訝な顔をしたけれど、わたしとしては単純にもう少し歌の時間がほしいただだけの話なのだ。そういう、世間では理解の及ばないようなことも、夫だけは全く反対しなかつた。

山川登美子の歌について、書き継いでみようと思つたのは、家にある「明星」の復刻版を役立てたかつたからでもあつた。結婚して五年くらいこのころ、三枝が買おうと言ひ出し、手に入れたものだ。ちよつと大きい買い物だつたけれど、それまでは国会図書館に行つて見ていたのだから、わたしに異存あるはずがない。平成四年にわれわれの仲間でも新しい短歌雑誌を出そうということになり、一定量の課題を与えられたとき、すぐに山川登美子という主題が浮かんだ。歌集ではなく雑誌に初出のかたちで一首一首を追うということが、登美子の歌の流れを見るうえでも理に適い、家にどーんと揃っている「明星」を活用することにもなるという発想は、ごく自然なものだつた。わたしにとつて三枝は、どこか仕掛け人の顔をしている。わたしに親しむようになってからと、結婚してからは数年の開きしかないのだし、話題の範囲が同じだから、歌と連れ合いとは意識のなかでどうしても重なる部分が多い。彼の方は相変わらずマイペースだけれど、しかし「このころ年齢差を感じなくなりまして……」などと言っているのをつい最近耳にした。あれは「このころ対等な口をきくようになりまして……」ってことじゃないかとわたしは思っている。だんだん態度がデカくなつてきたということだろう。それが歌詠みとして、といえるものであるならば、これまで



'80年、「現代短歌シンポジウムin熊本」懇親会で。
左から阿木津英氏、筆者、三枝昂之氏、伊藤一彦氏。

今野寿美

(こんの・すみ)

昭和27年、東京都生まれ。
同54年、「午後の章」五十首で角川短歌賞受賞。
平成4年、三枝昂之たちと「りとむ」創刊。
歌集に「花絆」「星刈り」「世紀末の桃」(現代短歌女流賞受賞)
「若夏記」「鳥彦」など。
短歌鑑賞書に「馬場あき子」「恋に揺れる野の花々」などがある。



自選歌五首直筆



'89年、現代短歌女流賞授賞式で。塚本邦雄氏と。

のこともまずまず甲斐があったということになるだろうか。
どうせなら、そう思っておこう。

一人はなほよしともに歌思ふ二人ある
こそ樂し苦しき

少年におはぐるとんぼ語るとききみ甦
へらする甲斐の水

ニッポニア・ニッポン絶えてああ皁月生
まれ変はつてもあなたであるか